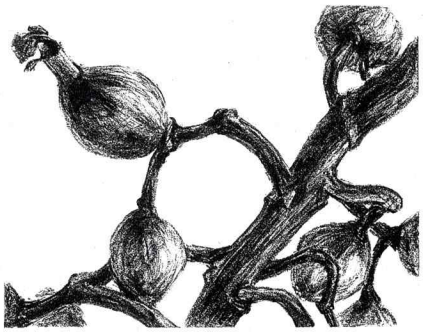
朝日歌壇 俳壇



〈ゲットウⅠ〉　日高理恵子

小林貴子選

夜の道月とはぐれてまた出会う　（横浜市）菅谷　彩香

どう見てもまなこの逸るる案山子かな　（東京都）望月　清彦

旅立ちし妻の手鏡色なき風　（東京都）野口　嘉彦

敬老日二足歩行の孫来たる　（習志野市）橋本眞理子

☆兜太似と子規似の木の実並べおく　（青梅市）市川　蘆舟

AIに責任感無しちんちろりん　（多摩市）金井　緑

凶作田見て銀行員すぐに去る　（横浜市）飯島　幹也

梨狩やプラスチックのナイフ持つ　（玉野市）加門　美昭

動かぬ躯叫びたき日よ獺祭忌　（山口県平生町）平岡久美子

バク転のパンダ転がす秋の晴　（青森市）天童　光宏

【評】一句目、しばらく見失っていた月と再会、何だか嬉しい。二句目、案山子と目を合わせようとしても、目を逸らされてしまう。案山子に意志あるごとし。三句目は妻への思いが深い。四句目、真面目に詠っているのに、俳諧味がじわりと。

長谷川櫂選

☆一歳の子を真ん中に敬老日　（泉大津市）多田羅紀子

台所に芋栗南瓜そろひけり　（下呂市）河尻　伸子

終の家二束三文秋の風　（福岡市）釋　蜩硯

敬老の日とてかはらぬ酒二合　（大和市）岩下　正文

☆兜太似と子規似の木の実並べおく　（青梅市）市川　蘆舟

リーダーに事欠く国の秋の暮　（一関市）砂金　眠人

虎刈りのやうなありさま梨を剝く　（東京都）久塚　謙一

出涸しとおととしの梅鰯炊く　（東京都）渡辺　礼司

汀女忌ややつと涼しくなる日影　（越谷市）花井芳喜代

俳壇の句評よこがき涼新た　（彦根市）阿知波裕子

【評】一席。敬老の日も主役はやはり赤ちゃん。なごやかな一家。二席。いずれ劣らぬ秋の主役たち。勢ぞろいの檜舞台。三席。わが家も所詮二束三文。追い立てるような秋風。十句目。日本語は縦書きも横書きも可。自在さが涼しい。

大串章選

道さがし秋の道ゆく旅人よ　（彦根市）阿知波裕子

借物で順入れ替わる運動会　（長崎市）田中　正和

幾千もの選句に感謝天高し　（茅ケ崎市）加藤　西葱

ひまはりの迷路に迷ひ結婚す　（熊本市）江藤　明美

☆一歳の子を真ん中に敬老日　（泉大津市）多田羅紀子

放置田も休耕田も花野かな　（今治市）横田青天子

水はみな水を追ひかけ秋の暮　（東京都）望月　清彦

毎日が修行と思ふこの残暑　（長野市）縣　展子

秀吉も寧々も同じ香菊人形　（川崎市）吉田ゆきえ

☆菊人形見え切る先に誰も居らず　（玉野市）勝村　博

【評】第1句。この「道」は人生の道でもある。進むべき道を真摯にさがし続ける。第2句。運動会の借物競争で「老人会会長」「白髪のマダム」などとあると大変。如何しても速く走れない。第3句。返句「幾千もの投句に感謝天高し　選者」。

高山れおな選

秋の暮センサー光る村にゐて　（加古川市）森木　史子

金色の翼がほしい秋うらら　（狭山市）長谷部寿子

つみびとの如くあふれて老人の日　（東京都）各務　雅憲

ひんやりと秋の蛙が手にとまる　（北茨城市）坂佐井光弘

新墓の父金秋のただ中に　（岡山市）小池　沙知

芝付きしラガー等の顔汗滂沱　（下田市）森本　幸平

虫の音や魚をほぐす老二人　（宝塚市）錦織　久夫

☆菊人形見え切る先に誰も居らず　（玉野市）勝村　博

余生なを夢のあれこれ新松子　（東京都）三角　逸郎

敬老の日のマイク離さず逝きにけり　（近江八幡市）若林　白扇

【評】森木さん。センサーが醸し出す、違和感そのものが俳句に。長谷部さん。この思いがすでに金の翼。各務さん。少子高齢化のニュースがこんな気分を誘うわけだが、ヒトの「長い老後」には種の存続のための積極的な意味があるのだとか。

うたをよむ　先の見えない不安

梅内　美華子

先の見えない生の不安を若い世代はどのように詠んでいるだろうか。

才能というギャンブルにくずおれた家族が回すビーチパラソル　川口慈子

川口慈子の第二歌集『Heel』より。家族が一丸となり夢に向かって邁進したが競争から降りることになった。夢を諦め醒めた時、「ギャンブル」のような危うさを持つものだったと総括される。敗北感に続くビーチパラソルの奇妙な明るさには解放感と安寧がないまぜとなっている。このような家族の物語は現代に少なくないが、ビーチパラソルが愛の在処を映し出す。

転生をはかるがごとく故障した指で再び弾くベートーヴェン　同

作者はピアニスト。困難に立ち向かうにはベートーヴェンがふさわしい。生き続けるための強さを模索する姿がある。

濱松哲朗の第一歌集『翅ある人の音楽』は多彩な修辞で力量を感じさせる。

後ろから押されても一人耐へてゐる最大多数の最大幸福　濱松哲朗

開かるる門のかたちにあふれ出づる饗宴の灯をしばし見留む　同

多数の力や幸福のモデルが信じられていた時代は過ぎた。「最大」には、驚異や称賛が含まれるが作者には脅威であり、小さな声による訴えがある。二首目は「饗宴の灯」の描写が美しい。その豊かさは自分から程遠いという。『聖書』のルカ伝に説かれる「富める人」と貧しい「ラザロ」を元に思索した歌であり、主体の疎外感や孤独感と重なり合う。

30代の彼らは言葉を研ぎながら人間性の保持を希求して詠んでいる。（歌人）

風信

恩田侑布子著「星を見る人」　評論集で副題は「日本語、どん底からの反転」。石牟礼道子、飯田蛇笏ら表現者の風合いある表現を取り上げた。（春秋社・2640円）

黒田杏子句集「八月」　3月13日に死去した俳人の最終句集。391句を収録。「花巡るいつぽんの杖ある限り」「狐火の紅蓮終生まなうらに」（角川書店・2970円）

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。